



TITLE:

オムスク観測行(4)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. オムスク観測行(4). 天界 1936, 17(187): 8-10

ISSUE DATE:

1936-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167360>

RIGHT:

オムスク観測行 (4)

山 本 一 清

(17)

食前からの約束により、吾々は最初に暗室に入つた。そして手速く今撮つたばかりのフィルムを現像し始めた。之れが愈々仕事の仕上げなので、一寸エキサイトさせられたが、幸に良い結果を齎した。只、コロナが意外に明るかつたので、吾々の寫眞は半秒以上の曝寫は皆少々超過してゐるらしく、之れでは内部コロナの構造を見るのは駄目かとさへ思つたが、しかし後日よく調べて、此の心配は無いことが判つた。

部分食の寫眞も立派に現像に成功した。すいぶん無鐵砲なやり方であると思つたが、しかし實に良かつた。一つの新経験であつた。

(18)

日食は終り、現像も終つて、観測場は喜びにザワメキ立つた。皆お互ひに天氣の心配から逃れて“おめでとう”を祝ひ合つた。國へ電報も出した。

新聞記者が多忙に駆けまはつてゐる。成功のニウスである。しかし、英國隊もソ國隊も、プログラムが複雑してゐるので、食が済んでも直ちに記者へ會ふことは出来ないらしい。吾々は、第一着に寫眞の現像も終つたのだし、コロナも、プロミネンスも充分見た話の種を持つてゐるのだから、自然、ニウスらしい結果は吾が日本隊の發表が最も彼等を満足させた。自分は、モスコイからの特派員たちに、

“コロナは非常に明るく、色は銀白色、三つ四つのプロミネンスも白みがかつて見えた。コロナの形は、極大型でなくて、むしろ中型らしく、太陽の兩極からの流線は噴出形ではなくて、デリケートな磁力線型であつた”と發表した。之れがオムスクからの最初のニウスとなつて、世界各地に發せられたのである。

(19)

“よその天氣は如何だろう？”之を皆が心配した。多くの新聞記者も盛ん

に各地へ問ひ合はせてゐたが、午後、バラノフスキ博士がアクブラク其の他へオムスクの状況を無線電話で知らせた序に、天氣を聞いて見たところ、アクブラクも、サラも、カウカソス地方も、かなりの雲に悩まされ、それでも何等かの寫眞觀測は出来たらしいが、しかし、クスタナイは此の日の朝から雨天であつたといふ。又、東部も、ハバロフスクに至るまで、何れも餘り上乘ではなかつた由。結局、全ソ國を通じて、オムスクが一番良い天氣であつたわけだと、バラノフスキ博士は言つて居た。

(19)

正午過ぎ、自分は暗室の傍で英國隊長カロール博士に會つたので、例により、お祝ひの挨拶のつもりで、

“May I say a congratulation to you, sir?”

と話しかけた。ところが、氏は何だか迷惑さうに、側の2、3人をも顧みながら、

“どうも、喜んで良いのか、何か、わかりません”

と、少し、きまり悪るさうである。“これはしまつた！ 何かあつたのか”と、自分は氣が附いて、遠慮したが、あとでソ國の人々に聞いて見たところ、英國隊は、皆既の最中にシロスタトに少々故障が起つて、(對物プリズム寫眞と閃光スペクトル寫眞には差支へなかつたけれど)、御大カロール氏の擔當するコロナの内部運動檢出の干涉計寫眞は失敗したのだとのこと。誠に氣の毒千萬である。

夕暮れ、カロール氏は此の觀測場から英國へ放送した際にも、此の失敗のことを一言してゐた。

(20)

日食は午前中に終つたので、吾々は此の日の午後、器械の片付けと荷作りをやつた。望遠鏡は、始めから置き去りにするつもりであり、其の他の雜品も大抵は棄てておく豫定であつたので、只、徑20糎の反射鏡面だけを取り外して、スリトケースに入れ、他の處分はソ國側に一任して了つた。其の残されたものの中から、シャイン夫人等は日本製の鑢詰や諸種のレツテル等を拾ひ集めて、紀念だと言つて喜んでゐた。

(21)

19日の夕刻、食堂で皆が喜びの晚餐を食べ終つた9時頃、ボーイが“日本からの御友達が御到着です!!”

と知らせた。 “さては”と思つて、食堂外に飛び出して見たら、元氣な濱田君がニコニコしてゐる所だつた。——日食は済んだのだから、今更、どうも仕方がない。誠に御氣の毒には違ひないが、とりあへず、英波兩國の天文家たちにも紹介し、翌20日には皆で再び観測場へ出かけて、現場を案内し、午後いよ々々宿に引き擧げて、荷作りし、今夜モスコイから到着する東行列車に乗る準備をした。

(22)

汽車は遅れて21日の朝10時に着いたので、之れにのり、夕刻ノブシビルスクに着いたので稲葉、濱田兩君は下車、次ぎの列車に乗り換へることとなり、従つて自分獨り同じ列車に乗り續けて、25日夕刻オトボル——滿州里の國境を越えた。それから翌26日は滿州里から新京まで飛行機、更に27日から汽車で、29日朝無事に京都着。之れで旅行は終つた(終)。

花山の掩蔽豫報『英曆』に發表さる!!

—— 来る1938年度より連載決定 ——

昨年来、英國航海曆編纂局と山本臺長との間に、花山天文臺に於る掩蔽豫報を同局で計算し、英曆に發表するに就て、種々協定する處があつたが、今回、去る8月13日附の同局の公文書にて、愈々、来る1938年度分の豫報計算成り、早速1938年曆に印刷中との通牒があつた。

その内容を見ると、光度7.5等以上の70星につき要素が算出されてゐる。之れにより、花山では愈々益々掩蔽観測に努力を傾注すると同時に、名古屋、神戸、倉敷、福岡、鹿兒島、京城等の各地豫報を導出し、廣く各地方に於ける観測を奨勵する事になつた。何れ精細は花山ブレテンに轉載さるゝ筈。

掩 蔽 課